

第		21		回						
住	民	の	自	治	・	統	治	研	究	会
	ご		あ		ん		な		い	

## 文献講読(その2)-仁平典宏著-「ボランティア」の誕生と終焉

〈贈与のパラドックス〉の知識社会学-第II部と序章(名古屋大学出版会)

と き:2013年9月7日(土)午後1時30分~4時

と ころ:大阪自治体問題研究所会議室

本書は、「ボランティアとは何か、どういう価値があるか」について、これまで人々は何を語ってきたか、に注目する。第II部、第5章「慰問の兄ちゃん姉ちゃん」たちの《1968》~第6章 國土と市民の邂逅、序章「ボランティア」をめぐる語りと〈贈与のパラドックス〉を講読します。

### 前回 2013.7.27 研究会の報告

＊＊ 文献講読(その1)-仁平典宏著-「ボランティア」の誕生と終焉〈贈与のパラドックス〉の知識社会学-第I部-栗本(第1・2章)・佃(第3・4章)報告 ＊＊  
1) 第1章 「ボランティア」のささやかな誕生-戦前期日本における〈贈与のパラドックス〉解決の諸形式

(1) 〈贈与〉の制度的環境→社会保障機能を担うことを期待された民間の慈善事業の多くは、法制度的な根拠を持たず資金を寄付等によって外部から調達する必要があった→「語り」の発生→言説化される慈善。∴贈与のパラドックス=実際の慈善は自己満足という疑念回避の方法として、利他の徹底、宗教の機能付与、社会的贈与などの意味付けがなされる。

(2) 〈社会〉の発見→連帯の根拠としての社会=規範概念としての社会→感化救済から社会事業への転換。

### 2) 第2章 戦後改革と不分明地帯の再構築-1945~1950年代前半

(1)戦前の国家と社会のあり方に対するアンチテーゼとしての民主化2要件→①国家に対する社会の自律、②国家による社会権の保障→この二つが贈与のパラドックス解決のための規準に。

(2)戦後直後の膨大な福祉ニーズの中で、民主化要件①②の両立は困難で、国家/社会に位置付けることができない不分明な制度的枠組みの出現→旧生活保護法・民生委員・社会福祉法人、赤い羽根と戦後直後の「総動員」、社協の設立、町内会の復活、教育的意味付けのボランティア、などが生まれる。

### 3) 第3章 〈政治〉と交差する自発性と贈与-1950年代前半~1960年

(1)冷戦構造のただ中→戦後数年間の基調=民主化・非軍事化は反転し、逆コースへ、国家/社会関係における民主化の2要件も同様に。1950年代[民主化を反転させる保守⇔民主化推進]→様々なシステム=(社会教育、非-政治としての「奉仕」)に適用されていく。「自発性/自主性/主体性」の語群が実定的な意味を帯び〈政治〉的な闘争の賭金として使用される→右派、左派を超えて、自らが掲げる価値を擁護するための〈政治〉的なカテゴリーであった。

(2)ボランティアの言表と運動の意味論の初接合→社会保障拡充の政治運動ではなく「デモクラシー」や「疎外に対する運動」の形で登場。ボランティアの語が持つ傾向性、政治との折り合いの悪さを示唆している。

### 4) 第4章 分出する「ボランティア」-1959~1970年

(1)1960年代社協によるボランティア推進政策が本格的に進められた時期→言説が生産/流通される場が整備→言説量は急激に拡大。安保闘争と大学紛争に挟まれ〈贈与のパラドックス〉に政治的な観点からの厳しいまなざしの時期。1960年代=制度化された言説領域でボランティアが〈分出〉〈誕生〉した時期。

(2)ボランティア推進の文脈→隣接カテゴリーを包摂する戦略→社会人、市民みなボランティア。〈良い贈与/悪い贈与〉=〈今/昔〉=〈ボランティア/奉仕〉=〈自発的か/非自発的か〉=〈対称的か/非対称的か〉の差異化戦略。

当研究会は自主研究会ですので、参加者には資料代1回=500円の負担の協力をお願いしています。

主催=住民の自治・統治研究会 (06-6354-7220)